



Osato Research Institute

Vol. 1 - No. 2
July 2003

ori report

大里研究所レポート

news 1

ORI Scientific Committee 開催される

2003年1月22日、フランス パリのユネスコ内会議室において、大里研究所主催による学術会議が開かれました。

リュック・モンタニエ教授をはじめ世界各国からFPPの研究に携わる研究者が集結、日本からも(財)ルイ・バスツール医学研究センターの岸田綱太郎理事長(京都府立医科大学名誉教授)と三石瑤子博士が参加しました。

モンタニエ教授が議長となり、各自のFPP研究の成果を発表、そして今後の研究の可能性と方向性について話し合いました。



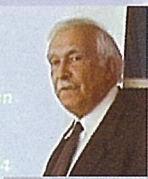
エリゼール・ラハメルヴィッチ 教授

イスラエル ハダツシュ大学

「赤血球内での反応性酸素種産生に関するFPP(ノバパイヤ発酵食品)の効果」を発表。

今後もFPPによる抗酸化効果と免疫システムの増強について研究を続ける。

QOLの科学的臨床結果に基づく規格化を試みる。



レスター・パッカー 教授

アメリカ 南カルフォルニア大学

FPP基礎研究のサマリー「抗酸化と免疫増強」FPPの抗酸化力と免疫増強との関係についての研究を発表。今後もFPPの作用メカニズムについて、特に、DNAマイクロ-アレイ分析法を血液モデルに使用したゲノム調整についての研究を続けていく。



マーク・ウェクスラー 教授

アメリカ コーネル大学

「老人ボランティア被験者への免疫学的臨床テスト、通常インフルエンザワクチンの抗体産生に対するFPPの効果」インフルエンザワクチンを接種した老人に対するFPPの免疫増強効果について発表。今後は、FPP内の混合物と有効成分の変化の研究。戦略方向として「病気を気にしている健康人」に向けてFPPの可能性を探る研究を続ける。



フランシスコ・マロッタ教授

イタリア ミラノ大学

FPPの臨床研究3ケースのサマリー：アルコール多飲症、シアノコバラミン吸収、慢性萎縮胃炎(ブラシーボに対して二重盲検)に対するFPPの臨床研究を発表。

岸田 綱太郎教授 / 三石 瑤子博士

(財)ルイ・バスツール医学研究センター



岸田教授：FPP摂取によるインターフェロンγ(ガンマ)産生能向上による臨床結果発表と今後のインターフェロンに関する免疫治療にFPPの使用する計画を発表。



三石瑤子博士：ガン患者への免疫治療臨床テストとしてFPPを用いる研究を発表。

リュック・モンタニエ 教授

(財)世界エイズ研究予防財団

予備的研究のサマリー「HIV感染者へのFPPによる治療」を発表。



林 幸泰代表 大里研究所

患者の負担なく、医師による治療効果、薬による治療効果を最大に高める食品としてFPPが医療現場に応用されるために、我々は何をすべきか。

ORI Scientific Committee Summary

今後の研究の方向性

- ① 発展のために、FPPの抗酸化と免疫増強についてより正確に評価するための診断検査法を、また、FPPの作用機序についてのより深い研究、特に遺伝子発現レベルにおいて続ける。
- ② FPPの有効成分の分析。
- ③ 栄養補助食品としての医療適用に導く。

特に次の状況下にて：

- ▶ 老人へのワクチン(特にインフルエンザワクチン)摂取に対する免疫反応の増加
- ▶ 胃腸、肝臓病：ウィルス性肝炎の減少効果

- ▶ 退行性疾患：古典的治療とともに(パーキンソン病、アルツハイマー)
- ▶ ガンの科学治療、放射線治療後の副作用の軽減
- ▶ エイズやガンへの免疫療法(インターフェロン)と科学療法との併用についての研究
- ④ ユネスコと連携してアフリカ諸国へのFPPによる援助。

あらゆるケースにおいて、ブラシーボ(擬似薬)を使った試験も含めた臨床試験、もしくはFPPに似た性質のある代替製品は効能を証明すべきである。

Interview

リュック・モンタニエ 教授

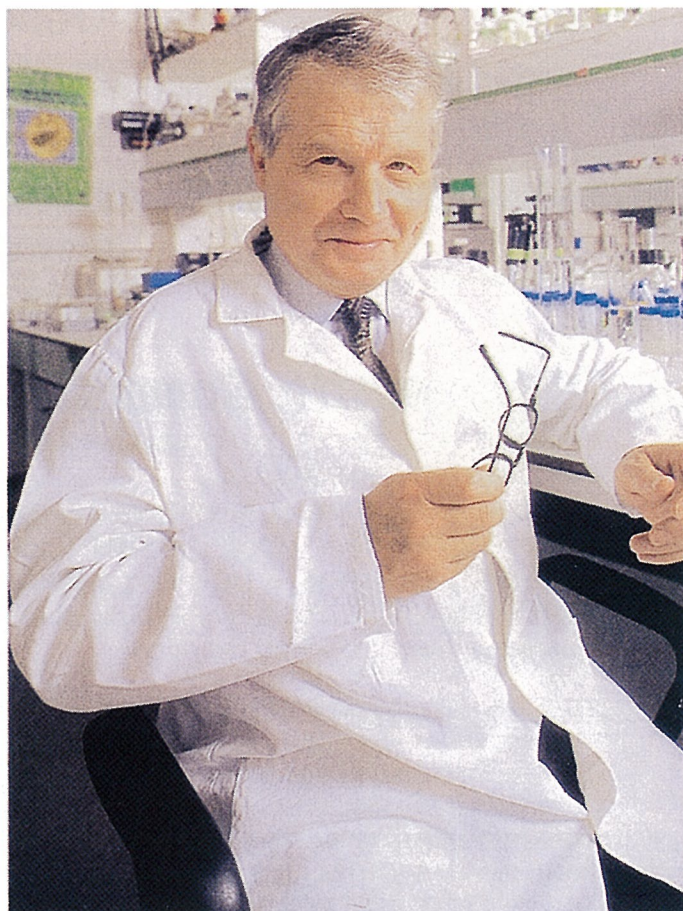
エイズウイルス発見者／パスツール研究所教授
(財)世界エイズ研究予防財団理事長

このインタビューは、フジテレビ パリ支局により、
2003年6月16日、パリ・ユネスコ本部内にある(財)
世界エイズ研究予防財団にて行われました。インタ
ビューの様子は、8月12日午前11時より、フジテレビ
およびフジテレビ系列局で放映される予定です。

リュック・モンタニエ 教授

Prof. Luc Montagnier

教授はボワチエおよびパリで医学と科学を修め、1963年カーシャル
トン科学研究所にてウイルスRNA複製のメカニズムを発見。
その8ヵ月後、今日でも広く利用されている凍結状態でも増殖する
ガン細胞の新しい特性を発見。
キュリー研究所で肉腫ウイルスRNA複製と構造を研究。
72年、パスツール研究所にウイルス腫瘍学部門を創設し教授に就任。
83年、エイズウイルスHIV Iの発見に続き、86年には第二のエイズ
ウイルスHIV IIを発見。
91年エイズにおける活力の喪失はアポトーシス(細胞死)、プログラ
ムされた細胞の死のプロセスによることを証明。
今日博士はフランス、アフリカ、アメリカから数々の協力を得てエ
イズのローコスト治療を追求し、世界中のエイズ患者を救済すべく
ワクチンの開発に取り組んでいる。
フランス国立科学研究センター銀メダル、ガン医学ローゼン賞、
フランス国歌勲章レジオン・ドヌール およびオードル・ナショナル
ル・ド・メリットなど数多くの賞・勲章を受賞。
フランス医学アカデミー会員。
フランス科学研究センター研究部長。
また、97年～2001年までニューヨーク クイーンズ・カレッジ分子
生物学センター教授兼部長を務めた。



Q 今、ヨーロッパではFPP(パパイヤ発酵食品)が非常に注
目されていると伺っています。これだけ有名になったのはモンタ
ニエ教授の影響が大きいように思いますが、教授はそもそもどう
いうきっかけで、FPPに注目されたのですか？

M 10年程前になりますが、第10回国際エイズ学会が横浜で
開かれた時、FPPを作っている林さんにお会いし、このFPPが
エイズ患者のみならず、免疫力低下に苦しむ患者の苦痛を軽減
できるのではと伺いました。当時はエイズに対する薬は、ほと
んどありませんでした。そこで林さんとの出会いを契機に、私
共はまず、アフリカでトリセラピー*の治療を受けているエイ
ズ患者を対象にテストを行いました。その結果、FPPだけでは
効果はありませんでしたが、トリセラピーと組み合わせると、
免疫の回復を助けることがわかりました。FPPの研究はアメリ
カやイタリアを中心に進んでおり、すでに多くの科学的結果が
出ていることを知っていましたので、他の病気にも効果がある
と確信し、ヨーロッパ、特にフランスに紹介したのです。

Q 教授が進められたFPP研究の結果について、分りやすくご
説明頂けますか？

M まず、植物というものは、この世で最も優秀な化学者であ
ることを認めなければなりません。植物は人類が地球上に現れ

る遙か以前に酸素から派生した有害な分子と出会い、それに対処してこなければなりませんでした。

人類は、この数百万年の間に植物が防御機能として自ら生成してきたものを、医療に役に立てるために適用していると言えます。FPPは、このビジョンに沿ったものです。

FPPは非常に複雑な成分を持っています。今のところ、FPPの成分の中で何が効力を持っているのかは、分かっていません。

しかし、ひとつははっきりしている重要なことは、生のフルーツそのものではなく、酵母による発酵が、この有効特性を与えるのだということです。

この有効特性には2種類あります。ひとつは抗酸化性。酸素から派生した有害な分子を無害化します。そしてもうひとつが免疫刺激効果。FPPは免疫システムの効果を局部的、また全体的に刺激します。

Q 現在、SARSが問題になっていますが、FPPの免疫刺激効果は、SARSなどに影響を与えることが出来ますか？

M まだSARSについては正確なデータがありませんが、私は効果があると思います。なぜなら普通の風邪もウイルスによるものですが、FPPが風邪に対して防御効果を持っていることは、既に分かっているからです。

風邪のウイルスはSARSに近いもので、コロナ・ウイルスとかリノ・ウイルスのようなものです。風邪をひいて数時間以内、つまり喉が痛いな…と思った時点でFPPを摂取すれば、風邪の進行はストップします。ですからSARSにさらされる可能性のある人、蔓延地域に住んでいる人、患者と接する人などが予防として用いれば、大変助かると思います。

Q では、FPPは病気になってからの治療だけでなく、予防として用いる場合が多いということですか。

M そうです。病気にかかってからよりも、予防の方が確かな効果が期待できるでしょう。他の病気についても、この方向で臨床実験を行うことを考えています。神経症の一種であるパーキンソン病の症状が重症化するのを予防するなどです。

Q FPPの効果は、教授がローマ法王にパーキンソン病の治療としてFPPを差し上げたことで一気に注目を集めましたが、実際に効果があったのですか、またその効果は持続するものなのでしょうか。

M アルツハイマーやパーキンソン病のような神経退行性の病気には酸化物が引き起こすストレスが大きく関わっています。つまり、体内の抗酸性分子が減少するために脳細胞が死んでいくのです。これに関してはすでに確かな科学的研究結果が出ていますので、抗酸性のものを治療に用いることは充分、理にかなっています。そこで、6月にパウロII世にお目にかかった時、

FPPともう一つとても強い抗酸性のある製品ギュタシオンを差し上げました。1ヶ月継続してお使いいただくようお願いしましたのです。

私自身、予防のために摂取していることも申し上げました。法王は試してみられるとおっしゃいましたし、実際に、その後数カ月のご様子を拝見している限り、法王のご健康は良好のようにお見受けしました。しかし、この件については直接、詳細な情報があるわけではないので、実際に、これらの製品で良くなられたのかどうかは断言できません。ただ、少なくとも、良好な状態を保たれていらっしゃるのであれば、ずっと摂取し続けておられるのだらうと思います。

今後、他のパーキンソン病患者の方々に対して、同様な治療を試みます。規則的・継続的に摂取すれば、症状は快方に向かい、また、他の薬の効果を妨げないことも分かっていますから。

Q FPPはそれだけ効果がありながら、パーキンソン病の治療薬ではないのですか？

M FPPは今のところ、医薬品ではありません。

パーキンソン病の治療薬に加えて用いられる栄養補助食品という位置づけです。

Q 栄養補助食品ということですが、しかし、将来的にはもっと先に進むことができるのではないのでしょうか？

M 我々は現在、実験室と臨床での実験を並行して行っています。実験室では複雑なFPP成分の何が効力をもっているのかを明らかにするための研究です。

一方、臨床に関しては、FPPの実効性が医学・科学界で幅広く認められるようにするための研究を行っています。そのために、エイズ、アルツハイマー、そしてパーキンソン病の患者の方々の臨床テストを積み重ねているのです。

Q 最後に伺いますが、教授はご自身でもFPPをご使用ですか？

M はい。ただし、幸い、今現在慢性的な病気を抱えているわけではないので、常時摂取はしておりません。

先ほども申し上げましたが、例えば喉の炎症などの初期とか、鼻炎のはじめなどには摂取します。そうするとすぐに炎症は治まり楽になります。また、職業柄、海外への渡航が多いため、時差ボケによる体調のアンバランスを予防するためにも摂取しています。

* トリセラピー：

三剤併用療法、三種類の抗HIV薬を服用する療法。

News2 モンタニエ博士、日本外国特派員協会で記者発表に臨む

4月21日、社団法人日本外国特派員協会に大里研究所
学術顧問、フランスのモンタニエ博士が招かれ、記者発表
を行いました。

時まさに“SARS”が中国本土・香港・台湾を中心とする

アジア及び世界各地で猛威を振っている最中。

また、3月に「ロンドン・タイムズ」紙がモンタニエ博士の
記事を“ローマ法皇の治療を成功させた”と報じたばかりと
いうタイミングで、注目を集めた記者発表でした。



日本外国特派員協会
で発表する
モンタニエ博士

博士は4月17日に福岡で開催された第77回日本感染症学会総会
の基調講演ゲストスピーカーとして招かれ、19日には文部科学省・エ
イズ教育指定地域の岐阜県大野町で地元の中学生約1,000人が参
加した「モンタニエ博士と子供たちのシンポジウム」に出席。
精力的に活動をこなすモンタニエ博士の日本でのスケジュールの最後
が本記者会見でした。

HIVウイルスの発見者として世界的に著名な博士は、(財)世界エイ
ズ研究予防財団理事長を務め、西アフリカ コートジボワールのエイ
ズ研究治療センターの共同設立者でもあります。感染症患者の免疫シ
ステムの研究に長年従事。ガンや免疫不全、エイズ等の各治療法、
ワクチンの開発研究等に携わるなかで、“FPP”（パパイア発酵食品）
をエイズ患者治療研究に取り入れ、その効果を論文にまとめて発表を
しています。

今回、博士はエイズとSARSの複合感染の危険性について警告。
特に中国では100万人のエイズ患者が南部に集中しており、今後SA
RSの感染が拡大すると死者急増の危険性があると示唆しました。
また、SARS治療法が開発されるまでは予防が最善の方法であり、
予防法としてパパイア発酵食品を試す価値があること、そして、フラン

スのSARS患者の治療を担当する同僚の研究者にパパイア発酵食
品を治療に取り入れることを助言したと語りました。

質疑応答では、英国「ザ・ガーディアン、ジ・オブザーバー」の記者
ジョナサン・ワッツ氏からの「飛行機による出張が多い博士は、ご自
身どのようなSARS予防対策を
されているか？」という質問に
対して、「日本で作られているパ
パイア発酵食品“FPP”（ヨーロ
ッパでは“Immun’Age”）を食
べている。これは免疫を高め、
数多くの感染症を防ぐことがで
きる。私自身、カゼをひきやす
い体質であったが、数年前から摂
取しはじめたところ、今ではひか
なくなった。私が行ったエイズ
の臨床研究でもよい結果が得ら
れており、SARSの予防にもなり
得ると思う。」と答えました。

この記者発表の内容は、ザ・ガ
ーディアン紙をはじめ、Channel-
news.comや国内外のニュース
メディアで報道されました。



The Guardian The Observer 紙の
特派員ワッツ氏の質問に答える

記者発表の内容を報じる
チャンネルニュースアジアのweb画面



2003年4月21日 日本記者クラブ 記者発表

日本外国特派員協会での記者発表に先立ち、
日本記者クラブで、記者発表が行われた。
モンタニエ博士は、日本はG8で唯一、HIV
感染者、エイズ患者が増加している国であると
指摘。
子供たちへの予防教育を強化する必要性を
訴えた。



OSATO RESEARCH INSTITUTE ユネスコ協賛 (財) 世界エイズ研究予防財団日本事務所 併設